

新型コロナウイルス感染症拡大下における 相談援助実習代替プログラムの成果と課題 －実習生自己評価結果をもとに－

小久保 志乃

新潟青陵大学福祉心理学部社会福祉学科

Outcomes and Issues of Social work field training alternative program during the Spread of the Coronavirus Disease 2019 Pandemic :Based on the results of evaluations of social work students

Shino Kokubo

Department of Social Welfare, Faculty of Welfare and Psychology, Niigata Seiryō University

キーワード

新型コロナウイルス感染症、相談援助実習代替プログラム、ふり返り（自己評価）

Key words

Covid-19, Social work field training alternative program, Self-Assessment Questionnaire

I 問題の背景と目的

2020年4月、新型コロナウイルス感染症の拡大により全国的な緊急事態宣言が出され、外出自粛要請や学校の休校措置が取られるなど社会に様々な変化がもたらされた。大学においても遠隔による授業実施など教育実践に大きな影響を与えた。遠隔授業は座学授業のみならず演習や実習形式の授業も対象とされ、文部科学省（2020）による調査¹⁾によれば、多くの大学が遠隔授業を実施していたことが報告されている。本学の社会福祉士養成課程の相談援助実習も遠隔授業を実施した一例である。本学も加盟している日本ソーシャルワーク教育学校連盟は、2020(令和2)年4月3日付で「新型コロナウイルス感染拡大傾向に伴う社会福祉士及び精神保健福祉士養成教育に対する考えについて」²⁾と題した会長声明を公表し、「私たちソーシャルワーク専門

職を養成する教育団体としては、ソーシャルワークの支援を必要とする利用者の生命を第一義に考え、利用者の権利と最善の利益を守るため、当面本年6月末日まで、実習先となる社会福祉施設・医療機関等の実習受入れに関する意向にかかわらず、学生の実習実施を見合わせる事」の依頼を会員校に行った。この会長声明を受けて、本学福祉心理学部においても、社会福祉士相談援助実習の中止を決め、代替措置へ転換するに至った。実習代替を行うにあたり、社会福祉士育成委員会を中心に対応策を検討し、社会福祉援助技術現場実習代替プログラムを開発した。そして、2020年7～8月に89人の学生が実習代替プログラムによる実習を実施し、全員が問題なく終了することができた。

実習は参加体験型の学習であり、学びの主体は学生自身であるため、学習成果の評価では、自己評価やふり返りの結果が重要視され

る。このことから、実習代替を終了した学生自身の到達目標の達成度に関する自己評価結果及び所感の内容分析により、実習代替プログラムによる学習の効果を明らかにし、今後も実施の可能性のある実習代替をより良いものにしていくための方策や課題について示唆を得ることを本研究の目的とした。そして、コロナ禍の長期化のみならず新たな災害リスクも想定されることから、このような緊急事態での対応策を評価することにより、今後のあらゆる災害に対し経験知として備え、学生への学修弊害をきたさないための手立てとしていくことを意図している。

II 社会福祉援助技術現場実習代替プログラムの概要

1. 実習代替プログラム作成の基本方針

社会福祉援助技術現場実習は、国の通知である「相談援助実習において学ぶべき事項(教育に含むべき事項)」³⁾に示されており、この内容との整合性を意識し、教育内容を吟味する必要がある。また、実習代替は、「実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えない」⁴⁾とされており、必要な知識と技能を習得したことが証明できるものでなければならない。そのた

め、プログラムの作成にあたっては、これらのことを念頭に、以下5点を基本方針とした。

- ・遠隔授業で実施するものとする。
- ・設定された期間内で実習生が計画的に取り組めるものとする。
- ・ジェネリックなソーシャルワークの理解を主要な目標とする。
- ・教材及び課題は共通のものとする。
- ・実習時間証明書の代わりとなる記録を残せるものとする。

2. 主目標としてのジェネリックなソーシャルワークの理解

専門性の異なる分野でのスペシフィックな実習体験は、ジェネリックなソーシャルワーク理論への置き換えが必要である⁵⁾。つまり、いかなる分野の、どのような機関・施設で、誰が指導しようとも、標準的な実習体験を学生に提供したいという、実習の共通性・通底制の意図は国の通知³⁾にも示されている。このことから、実習代替プログラムでは、ジェネリックなソーシャルワークの理解を主目標とし、「基礎的・通底的ソーシャルワーク4領域」(1. 個別支援、2. 権利擁護・サービス向上、3. 地域支援、4. 連携・ネットワーキング)⁶⁾を学べるプログラム構成とした。なお、4領域と国の通知による教育に含むべき事項との関連は図1のとおりである。



図1 基礎的・通底的ソーシャルワーク4領域と教育に含むべき事項との関連

3. 実習施設・機関、実習指導者との協働による教材作成

実習代替プログラム作成の計画段階から大きな課題となっていた現場実習でなければ経験できない内容を補足するためのアプローチとして、本学社会福祉援助技術現場実習担当教員、職能団体、実習施設・機関、実習指導者との協働作業により動画やワークシートなどの教材を作成した。プログラム実施前の2020年5～6月に作成した教材は表1のとおりである。

III 研究方法

1. 実習代替プログラムの具体的内容とふり返り（自己評価）

(1) 実習代替プログラムの具体的内容

各プログラムにおける到達目標、実習項目、具体的実習内容、時間、課題（提出物）、実施期間については、表2のとおりである。なお、実習代替プログラムの時間設定は、例年、本学では分散型で実習を行っていることから、第1段階実習の代替（合計90時間）として設定した。

(2) 実習代替プログラムふり返り（自己評価）の実施

実施した実習代替プログラム内容のふり返り（自己評価）を行うことで、学習成果と課

題の抽出を行いたいと考え、【プログラム1～5】が終了した2020年8月に、【プログラム6】として、実習生89人を対象にGoogleフォームによる実習代替プログラムのふり返り（自己評価）を実施した。項目はプログラム1～5で設定し、4段階評価で求めた学習の到達目標の達成度についての回答と各プログラムをふり返っての所感である。

2. ふり返り（自己評価）の分析方法

ふり返り（自己評価）のデータは2つの方法で分析する。4件法で回答した項目については、十分できた4点、おおむねできた3点、あまりできなかった2点、まったくできなかった1点として4段階評価で達成度を測定した。各プログラムをふり返っての所感については、テキストマイニングによる共起ネットワークの提示により、質的な傾向を明らかにした。

倫理的配慮については、回答は任意とし、メールアドレスも含めて個人を特定する情報は収集していない。そのため、回答の有無や回答内容は成績には一切影響しないこと、回答しない場合も一切の不利益がないこと、ふり返り（自己評価）の回答をもってこれらに同意が得られたものと判断することを明記した。

施設・機関紹介動画	実習指導者からのメッセージ・助言
<ul style="list-style-type: none"> 特別養護老人ホーム A施設 小規模多機能型居宅介護施設 B施設 地域包括支援センター C施設 グループホーム Dホーム 障害者支援施設 E施設 障害者支援施設 F施設 障害者就業・生活支援センター Gセンター 	<ul style="list-style-type: none"> 【地域】社会福祉協議会 実習指導者A様 【地域】独立型社会福祉士事務所 実習指導者B様 【障害】精神科病院 実習指導者C様 【障害】障害者支援施設 実習指導者D様 【児童】乳児院 実習指導者E様 【高齢】特別養護老人ホーム 実習指導者F様 【高齢】地域包括支援センター 実習指導者G様
講義動画	
<ul style="list-style-type: none"> コロナ感染症拡大に伴う実習中止の説明 実習生としての心得・マナー（代替実習ver） 代替実習のすすめ方 プログラム1オリエンテーション動画 プログラム2オリエンテーション動画 プログラム3オリエンテーション動画 プログラム4オリエンテーション動画 プログラム4講義動画①新潟県社会福祉士会総会・研修会 	<ul style="list-style-type: none"> プログラム5オリエンテーション動画 プログラム5講義動画① プログラム5講義動画② プログラム5講義動画③ プログラム5講義動画④模擬カンファレンス（障害分野：障害者支援施設 社会福祉士D様在籍施設） プログラム5講義動画⑤模擬カンファレンス（社会福祉協議会：E協議会）

表1 実習代替プログラム用動画教材

新型コロナウイルス感染症拡大下における相談援助実習代替プログラムの成果と課題

表2 実習代替プログラム内容と課題（合計90時間）

【プログラム1】「社会福祉士の職場を学ぶ」（20.5時間）						
到達目標		①『社会福祉士の職場とサービス利用者の特徴を説明できる』 ②『他職種の業務内容及び多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの重要性を理解し、説明できる』 ③『実習施設・機関が地域社会の中の施設・事業者・機関・団体等の一員としてどのような貢献をしているか資料をもとに発表できる』				
実習項目		具体的内容	時間	方法	提出物	実施日・期間
1-1	プログラム担当教員による説明・指導を受ける	担当教員からプログラム1についての説明を聞き、実習内容と課題について理解した上で、取り組み上の留意点や助言を聞くなどの指導を受ける。	1	Googleclassroom (プログラム1-1)	感想	7/13(月)～7/19(日)
1-2	社会福祉現場の動画を視聴し、ノートにまとめる	社会福祉現場（特別養護老人ホーム）の実習施設の紹介動画をメモをとりながら視聴し、施設・事業所ごとに事業内容や特徴などをノートにまとめる。	9	Googleclassroom (プログラム1-2)	指定課題	
1-3	施設紹介のプレゼン資料を作成する	① 配属先施設について情報を集めるとともに、サービス内容等について調べ、プレゼン資料としてスライドを作成する。（リサーチ） ② ①で作成したスライドを使い、利用者・ご家族への施設紹介場面を想定して、模擬的に説明してみる。また、それを「パワーポイントの記録機能」を使って、撮影する。（課題作成） ③ ②で撮影した動画を視聴し、良かった点・不足している点を確認し、自己評価を行う（ふり返り）。	9	Googleclassroom (プログラム1-3)	指定課題	
1-4	実習記録を作成する	プログラム1をふりかえり、考察した内容をレポート作成するとともに実習施設・機関及び実習指導者への質問事項を設定し、担当教員に提出する。	1.5	Googleclassroom (プログラム1-4)	プログラム1を通して学べたこと等	
【プログラム2】「地域支援を学ぶ」（20時間）						
到達目標		①『多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実際を説明できる』 ②『実習施設・機関が地域社会の中の施設・事業者・機関・団体等であることへの理解と具体的な地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発の方法の特徴を調べてまとめることができる』				
実習項目		具体的内容	時間	方法	提出物	実施日・期間
2-1	担当教員による説明・指導を受ける	担当教員からプログラム2についての説明を聞き、実習内容と課題について理解した上で、取り組み上の留意点や助言を聞くなどの指導を受ける。	1	Googleclassroom (プログラム2-1)	感想	7/20(月)～7/26(日)
2-2	コミュニティソーシャルワークについての動画を視聴し、ノートにまとめる	NHK「地域づくり」アーカイブスの関連動画をメモをとりながら視聴し、地域支援の展開プロセス、支援のポイントなどをノートにまとめる。	5	Googleclassroom (プログラム2-2)	指定課題	
2-3	フィールドワークを行い、利用者・家族が施設を知る手段を調べる	①利用者・家族の立場で、実習施設・機関を知るためには、どのような手段があるか（インターネット環境がないことも想定）、市役所や図書館なども活用し、実習施設・機関のある地域の人口動態、生活状況、文化・産業なども踏まえ、実習施設・機関を調査する。 ②「地域の茶の間の開設手引きを参考に地域の茶の間を開設する。」とし、自分の「地域の茶の間」のオープン チラシまたはポスターを作成する。	12	Googleclassroom (プログラム2-3)	指定課題	
2-4	実習記録を作成する	プログラム2をふりかえり、考察した内容をレポート作成するとともに実習施設・機関及び実習指導者への質問事項を設定し、担当教員に提出する。	1.5	Googleclassroom (プログラム2-4)	プログラム2を通して学べたこと等	
【プログラム3】「連携・ネットワーキングを学ぶ」（18時間）						
到達目標		①『多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実際を調べて伝達できる』 ②『施設・事業者・機関・団体等の経営やサービスの管理運営の実際を理解する』 ③『実習先が地域社会の中の施設・事業者・機関・団体等であることへの理解と具体的な地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発に関する特徴を述べる事ができる』				
実習項目		具体的内容	時間	方法	提出物	実施日・期間
3-1	担当教員による説明・指導を受ける	担当教員からプログラム3についての説明を聞き、実習内容と課題について理解した上で、取り組み上の留意点や助言を聞くなどの指導を受ける。	1	Googleclassroom (プログラム3-1)	感想	7/27(月)～8/2(日)
3-2	地域支援における社会福祉士の役割・チームアプローチに関する資料を作成する	①「連携・ネットワーキング」に関する基本的な用語の整理を行う。 ②軽度認知症高齢者の生活支援事例と「エコマップ・ジェノグラム」の書き方の資料を作成し、担当教員へ提出する。 ③地域支援における社会福祉士の役割や業務に関するプレゼン資料をPowerPoint資料等で作成し、担当教員へ提出する。	11	Googleclassroom (プログラム3-2)	指定課題	
3-3	作成した資料を説明する	Zoom等で同じグループの学生に社会福祉士の役割や業務についてプレゼンする。	4	Googleclassroom (プログラム3-3)	指定課題	
3-4	実習記録を作成する	プログラム3をふりかえり、考察した内容をレポート作成するとともに実習施設・機関及び実習指導者への質問事項を設定し、担当教員に提出する。	1.5	Googleclassroom (プログラム3-4)	プログラム3を通して学べたこと等	

【プログラム4】：「個別支援を学ぶ」（14時間）						
到達目標		①『利用者やその関係者、施設・事業者・機関・団体等の職員、地域住民やボランティア等との基本的なコミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成に取り組むことができる』 ②『利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成ができる』 ③『利用者やその関係者（家族・親族・友人等）との援助関係の形成における基本的技能を習得する』 ④『利用者やその関係者（家族・親族・友人等）への権利擁護及び支援（エンパワメントを含む。）とその評価ができる』				
実習項目		具体的内容	時間	方法	提出物	実施日・期間
4-1	担当教員による説明・指導を受ける	担当教員からプログラム4についての説明を聞き、実習内容と課題について理解した上で、取り組み上の留意点や助言を聞くなどの指導を受ける。	1	Googleclassroom (プログラム4-1)	感想	8/3(月)～8/9(日)
4-2	援助関係構築におけるポイントについて考察する	①新潟県社会福祉士の活動紹介の研修動画を視聴し、感想を提出する。 ②各分野で活躍する実習指導者からの実習生へのメッセージ動画を視聴し、援助関係形成に向けたポイント等をノートにまとめる。	8	Googleclassroom (プログラム4-2-1) Googleclassroom (プログラム4-2-2)	指定課題 指定課題	
4-3	面接場面を考察する	事例（児童・障害、高齢者分野）について、ワークシート（考察と自分ならどうするか）に取り組む。	3	Googleclassroom (プログラム4-3)	指定課題	
4-4	実習記録を作成する	プログラム4をふりかえり、考察した内容をレポート作成するとともに実習施設・機関及び実習指導者への質問事項を設定し、担当教員に提出する。	1.5	Googleclassroom (プログラム4-4)	プログラム4を通して学べたこと等	
【プログラム5】：「権利擁護・サービス向上を学ぶ」（16時間）						
到達目標		①『利用者やその関係者（家族・親族・友人等）への権利擁護及び支援（エンパワメントを含む。）とその評価の重要性を理解する』 ②『社会福祉士としての職業倫理、施設・事業者・機関・団体等の職員の就業などに関する規定への理解と組織の一員としての役割と責任への理解を深める』 ③『施設・事業者・機関・団体等の経営やサービスの管理運営の現状と課題を説明できる。』				
実習項目		具体的内容	時間	方法	提出物	実施日・期間
5-1	担当教員による説明・指導を受ける	担当教員からプログラム5についての説明を聞き、実習内容と課題について理解した上で、取り組み上の留意点や助言を聞くなどの指導を受ける。	1	Googleclassroom (プログラム5-1)	感想	8/10(月)～8/16(日)
5-2	模擬事例検討会に参加する	オンデマンド形式で模擬カンファレンス動画（障害者施設（緑風園）・社会福祉協議会（燕市社協））を視聴し、地域住民や障害者の権利擁護の取組みがどのように行われているかまとめ、提出する。	3	Googleclassroom (プログラム5-2)	指定課題	
5-3	個別支援計画を作成する	模擬カンファレンスの事例を基に、ICFを使ったアセスメントにより生活ニーズを特定し、生活ニーズに基づくケアプランを作成する。	6	Googleclassroom (プログラム5-3)	指定課題	
5-4	施設・事業者・機関・団体等の経営やサービスの管理運営の現状と課題をまとめる	権利擁護の視点に基づいて、福祉施設等で行われているサービス向上策（福祉サービス評価と公表制度、苦情解決制度）について学び、課題に取組み提出する。	4	Googleclassroom (プログラム5-4)	指定課題	
5-5	実習記録を作成する	プログラム4をふりかえり、考察した内容をレポート作成するとともに実習施設・機関及び実習指導者への質問事項を設定し、担当教員に提出する。	1.5	Googleclassroom (プログラム5-5)	プログラム5を通して学べたこと等	
【プログラム6】：「ふりかえり」（3時間）						
到達目標		代替実習をふりかえり、自己評価ができる。				
実習項目		具体的内容	時間	方法	提出物	実施日・期間
6-1	実習振り返りシートを作成する	ふりかえりシートに基づいて自己評価を行う。	2	Googleclassroom (プログラム6)	指定課題	8/17(月)～8/23(日)
6-2	担当教員による説明・指導を受ける	代替実習を振り返るとともに、第2段階実習に向けた事前学習のテーマを設定する。	1.5			

表2 実習代替プログラム内容と課題（合計90時間）

IV 分析結果

ふり返り（自己評価）の回収結果は89人中87人から回答を得たため、回収率は98.9%であった。

1. 到達目標の達成度

プログラムのテーマは【プログラム1】「社会福祉士の職場を学ぶ」、【プログラム2】「地域支援を学ぶ」、【プログラム3】「連携・ネットワークを学ぶ」、【プログラム4】「個別支援を学ぶ」、【プログラム5】「サービス向上・権利擁護を学ぶ」とした。

各プログラムの項目に対する到達目標の達成度について、「十分できた4点、おおむねできた3点、あまりできなかった2点、まったくできなかった1点」として、4段階評価で達成度を測定し、プログラムの項目間で比較した(表3)。全体的にはおおむね到達目標を達成していたことが明らかとなった。「十分できた」「おおむねできた」が80%未満を達成度が相対的に低い項目、90%以上を高い項目と設定したところ、該当する項目は次のとおりとなった。

まず、達成度が比較的低い項目は、【プログラム4】『利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成ができる』78%、【プログラム1】

『実習施設・機関が地域社会の中の施設・事業者・機関・団体等の一員としてどのような貢献をしているか資料をもとに発表できる』89%、

【プログラム5】『施設・事業者・機関・団体等の経営やサービスの管理運営の現状と課題を説明できる』89%の順に達成度が低かった。

次に、達成度の高かった項目は、【プログラム1】『社会福祉士の職場とサービス利用者の特徴を記述することができる』100%、『他職種の業務内容及び多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの重要性を理解し、説明できる』100%、【プログラム4】

『利用者やその関係者、施設・事業者・機関・団体等の職員、地域住民やボランティア等との基本的なコミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成に取り組むことができる』99%、【プログラム5】『社会福祉士としての職業倫理、施設・事業者・機関・団体等の職員の就業などに関する規定への理解と組織の一員としての役割と責任への理解を深める』99%、『利用者やその関係者（家族・親族・友人等）への権利擁護及び支援（エンパワメントを含む。）とその評価の重要性を理解する』98%、【プログラム2】『多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実際を説明できる』97%であった。

プログラム	到達目標	十分できた	おおむねできた	あまりできなかった	まったくできなかった
1 社会福祉士の職場を学ぶ	社会福祉士の職場とサービス利用者の特徴を記述することができる。	44%	56%	0%	0%
	他職種の業務内容及び多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの重要性を理解し、説明できる。	44%	56%	0%	0%
	実習施設・機関が地域社会の中の施設・事業者・機関・団体等の一員としてどのような貢献をしているか資料をもとに発表できる。	30%	59%	11%	0%
2 地域支援を学ぶ	多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実際を説明できる。	40%	57%	4%	0%
	実習施設・機関が地域社会の中の施設・事業者・機関・団体等であることへの理解と具体的な地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーク、社会資源の活用・調整・開発の方法の特徴を調べてまとめることができる。	34%	61%	5%	1%
3 連携・ネットワークを学ぶ	多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実際を調べて伝達できる。	42%	52%	6%	0%
	施設・事業者・機関・団体等の経営やサービスの管理運営の実際を理解する。	31%	61%	8%	0%
	実習先が地域社会の中の施設・事業者・機関・団体等であることへの理解と具体的な地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーク、社会資源の活用・調整・開発に関する特徴を述べるることができる。	23%	66%	11%	0%
4 個別支援を学ぶ	利用者やその関係者、施設・事業者・機関・団体等の職員、地域住民やボランティア等との基本的なコミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成に取り組むことができる。	48%	51%	1%	0%
	利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成ができる。	36%	42%	22%	0%
	利用者やその関係者（家族・親族・友人等）との援助関係の形成における基本的技能を習得する。	33%	60%	7%	0%
	利用者やその関係者（家族・親族・友人等）への権利擁護及び支援（エンパワメントを含む。）とその評価ができる。	27%	64%	9%	0%
5 サービス向上・権利擁護を学ぶ	利用者やその関係者（家族・親族・友人等）への権利擁護及び支援（エンパワメントを含む。）とその評価の重要性を理解する。	49%	49%	2%	0%
	社会福祉士としての職業倫理、施設・事業者・機関・団体等の職員の就業などに関する規定への理解と組織の一員としての役割と責任への理解を深める。	42%	57%	1%	0%
	施設・事業者・機関・団体等の経営やサービスの管理運営の現状と課題を説明できる。	21%	67%	12%	0%

表3 到達目標の達成度

2. 実習代替プログラムに対する学生のふり 返りと所感

(1) 語の出現頻度と特徴

「実習代替プログラムをふりかえり、所感を記述してください。」として学生に求めた自由記載のデータについて、KH Coderを利用したテキストマイニングによる分析を行った⁷⁾。KH coder を活用することで、ふり返りの所感に記載されたテキストデータに対して容易に形態素解析を行うことができ、テキストデータに含まれる語を抽出することができる。また、「実習代替」や「支援計画」のように複合語として用いられていると考えられる語については、複合語のまま抽出する指定を行うことも可能である⁸⁾。

KH coderによる前処理実施の結果、総抽出語数は33,888語、異なり語数は1,604語であった。複合語については10件以上出現した、「社会福祉士」、「利用者」、「実習先」、「エコマップ」等の55語を強制抽出した。出現回数30回以上の語彙を表4に示した。

出現頻度の最多は「学ぶ (327回)」で、次いで「思う (246回)」、「施設 (228回)」、「支援 (207回)」、「考える (199回)」、「利用者 (198回)」となった。

多くは実習代替の内容に関連する語であるが、なかには行動を表す「見る」「調べる」「作る」があった。KWICコンコーダンスで確認したところ、「見る」はさまざまな施設やそこで働く職員の実際の様子について、動画を視聴することで理解が深まったこと、「調べる」は実習先や利用者の理解を深めるためにエコマップなどのアセスメント方法の確認、「作る」は調べたことや考えたことをレポートや発表資料として作成したことであった。

このことから、現場実習で想定していた実習計画における具体的実習希望項目であげていた内容について、積極的に学びを得ようとする学生の主体的な取り組み姿勢がイメージとして伝わってきた。

(2) 共起ネットワーク

次に、「(1) 抽出語の出現頻度」における単語と単語の共起関係を確認するために共起ネットワーク図を作成し、共起語のつながりを可視化した。集計単位を「段落」とし、最小出現数10、描画数60の条件で共起ネットワークを作成した。これにより、出現パターンの似通った語を線で結び、出現語同士の類似性を視覚化することができる。作図にあたっては解釈のしやすさの点から最小スパニングツリー描画とした(図2)。

抽出語が3語以上結びついている箇所に注目すると、抽出語は5つのグループに分類された。各抽出語が用いられている文脈を確認することで、各グループは以下のように解釈できる。

グループ1：様々な分野の施設について知ることができた

グループ2：地域について知ることができた

グループ3：地域支援における社会福祉士の役割を理解できた

グループ4：利用者を取り巻く関係性に着目して支援を考えた

グループ5：個別支援計画の作成が難しかった

新型コロナウイルス感染症拡大下における相談援助実習代替プログラムの成果と課題

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
学ぶ	327	支援計画	53
思う	246	サービス	53
施設	228	内容	53
支援	207	機関	51
考える	199	取り組む	51
利用者	198	エコマップ	48
自分	196	難しい	48
実習	188	苦情	46
理解	184	事前学習	46
地域	178	向ける	45
感じる	160	関係	43
社会福祉士	152	権利擁護	43
実習先	115	クライアント	40
必要	109	ジェノグラム	40
事例	104	改めて	40
実際	104	対応	40
知る	104	現場	39
課題	95	情報	38
行う	92	今	36
出来る	90	家族	36
役割	89	重要	36
作成	81	制度	36
調べる	81	説明	36
様々	76	復習	36
動画	74	持つ	35
段階	68	本人	35
分野	67	活用	34
知識	66	詳しい	33
人	65	社会資源	32
大切	65	作る	31
代替実習	64	実習施設	31
深める	62	地域支援	31
見る	58	確認	30
福祉	58	学び	30
学習	57	今回	30
ニーズ	56	視点	30
連携	56	資料	30
行く	54	問題	30
分かる	54		

表4 出現回数30回以上の語彙

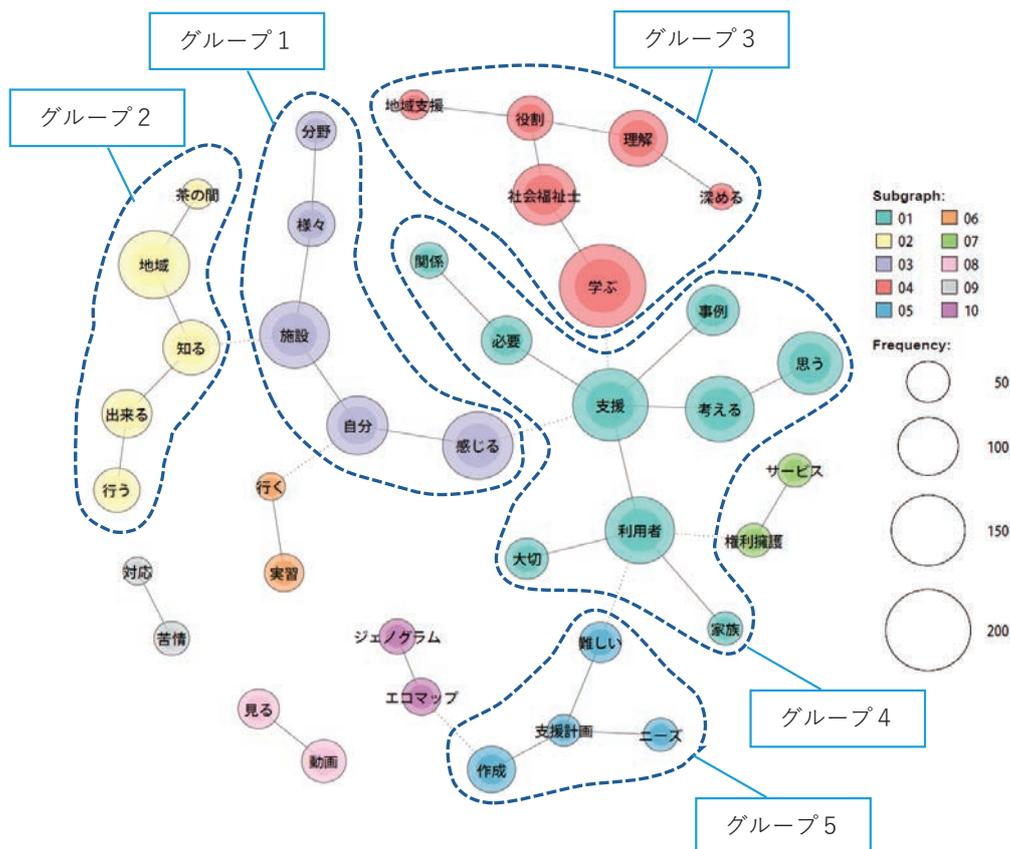


図2 共起ネットワーク図

V 考察

本学の相談援助実習代替プログラムによる学習の成果としては、社会福祉士の職場および活動フィールドとしての地域に関する理解を促進できた点があげられる。学生は、自分の配属先以外の様々な分野の施設のことや地域支援の実際について知ること、社会福祉士の役割⁹⁾に関するイメージをつかむことに役立ったものと考えられる。このような学習成果をもたらした要因としては、実習先施設・機関との協働により作成した施設紹介動画や多様な事例に触れられるように工夫して作成したワークシートなどの教材を有効に活用して学習課題を提示できたことが大きいものと考えられる。一方、課題としては、教材量の増大に伴って学習管理面での困難や学生の負担感が生じた点があげられる。また、多様な事例に触れることで、利用者を取り巻く関係

性に着目した支援を考えることの大切さについて理解を促すことはできたものの、個別ニーズを把握させ、個別支援計画を作成できるまでのプロセスを理解させるには至らなかったことも課題であり、改善策を検討していく必要がある。

本研究で明らかになった実習代替プログラムによる学習の成果と課題を経験知として残すため、教材づくりのプロセスや学習管理面のふり返しを行うとともに、今後の改善策について考察を加える。

1. 既存ネットワークとの有機的連携に基づく社会福祉士の役割理解

上述したように学生は自分自身の配属先以外の様々な分野の施設のことや地域支援の実際について知ること、社会福祉士の職場および活動フィールドとしての地域を知ることにつながり、社会福祉士の役割についてイメ

ージをつかむことができていた。これについては、作成の計画段階から大きな課題であった「現場に行かなければ経験できない内容に対するアプローチ」の工夫として、本学登録の実習施設や施設職員、実習指導者の協力のもと、できる限りリアリティを感じられるような工夫を施した視聴覚資料を教材として整備できたことが奏功したものと考えられる。

また、新潟県社会福祉士会、新潟県医療ソーシャルワーカー協会、新潟県介護支援専門員協会などの専門職団体や教員が日ごろから行っているフィールドワーク活動によって培われたネットワークやアイデアとの積極的な連結も効果的であったと考える。このような教員が保有するネットワークとの有機的連携の重要性について、学内実習代替の検討プロセスに着目してソーシャルワーク実習のあり方を模索した茶屋道ら（2020）は、どのような人材が地域にいるか、どのような学びの提供が可能か、などといった既知の情報とこの機会だからこそ提供できるソーシャルワークに関する学び、既存の枠にとらわれない柔軟な発想などとの重なり合いによってプログラミングされたことを回想している¹⁰⁾。本学の実習代替プログラムにおいても、本学社会福祉援助技術現場実習担当教員、職能団体、実習施設・機関、実習指導者との協働作業により動画やワークシートなどの教材作成が可能になったように、日ごろから地域で実習指導者ら専門職との実践・活動を重視している非常勤講師を含む学内教員が有する人的ネットワークの存在が実習代替プログラムの基盤となったと考えられる。

2. 教材作成と学習管理面の課題

実習代替プログラム（表2）で示したとおり、実習代替プログラムでは、本学社会福祉援助技術現場実習担当教員、職能団体、実習施設・機関、実習指導者との協働作業により作成した動画やワークシートなどの教材を活用した

が、この教材作成の過程で、学内外との連絡調整業務を中心とした業務量の増大という問題に直面した。この問題に対して、実習に係る当初予算を柔軟に運用すべく行われた精査や予算の再編成、非常勤講師や実習指導者との調整、学内の関係部局との調整など、福祉系実習支援室職員からのサポートがスムーズなプログラミングの促進力となった。

一方で、動画やワークシートなど教材の量的増大に伴う学習管理面での課題も生じた。上述の既存ネットワークとの有機的連携、実習指導者等との協働により作成された施設紹介動画などオンデマンド教材の配信やワークシートなど課題提示についてはGoogle classroomを使用した。

また、実習記録や学修成果物の管理についてはGoogle Driveを使用するなど、紙媒体ではなく全てクラウドで管理する方法で実施した。これにより教員は学生の提出書類をリアルタイムで確認でき、内容の不備や未提出に関して随時の連絡・指導ができたことはGoogle classroomの活用による学習支援の成果と考えられる。

学生側からすると、他のオンラインによる授業の継続に加え、実習代替プログラムにおいても、動画配信、調べ学習、ワークシート、レポートなどの課題中心の構成であったため、学修量の増大に伴う精神的負担感は相当のものであったと想像できる。このような時間管理や課題提出に関する学生の負担感を軽減するための配慮に欠けたことは課題であり、必要に応じて随時微修正できるようなシステムづくりや、チャット機能やオンラインによる講義等の場面で学生の声を傾聴し、双方向の関係性の中で精神的な負担感を軽減させるような実習生支援の体制を構築しておくことが求められる。

3. コミュニケーション体験の不足と限界

到達目標の達成度についての自己評価結果

やふり返り記述内容の分析結果から、実習代替プログラムによる学習には一定の効果があることがわかった。一方で、「個別支援計画の難しさ」「実習施設・機関が地域社会の中の施設・事業者・機関・団体等の一員としてのどのような貢献をしているか」「経営やサービスの管理運営の現状と課題を説明」の項目についての達成度は比較的低くなる傾向が認められ、プログラム改善の余地があることもわかった。これら学生自身による自己評価が低かった項目は、現場に行かなければ経験できない内容である。利用者や実習施設・機関の機能の理解を深めるための工夫やソーシャルワークの展開過程に不可欠な援助者としての実感やリアリティの欠如をどう補うか、プログラム実施前から懸念していたことではあるが、現実的な場面で体験できるはずのコミュニケーション体験の不足が露呈され、大きな検討課題として残された。

前述したように、現場に行かなければ経験できない内容についてどのようにアプローチするかは、実習代替プログラム作成の計画段階から大きな課題であった。教材や課題への工夫を行ったものの、実習代替プログラムにおいては現実的な場面で体験できるはずの利用者とのかかわり等を含めたコミュニケーション経験を補うことができず、具体的な利用者像や生活問題の実態について、リアリティをもって伝えることが困難であった。

施設紹介動画などオンデマンド教材では、普段の施設の雰囲気、利用者の様子などが伝わるような演出を試みたり、実際の事例を用いて社会福祉士としての利用者との関わりや感情を語ってもらうなど、コミュニケーション場面をイメージできるような配慮はしたもののやはり限界はあった。実際に見て、聞いて、話してという直接的で双方向的な関わりなど利用者理解のために必要な体験の不足は、ニーズに応じた個別支援計画作成が難しかったという学生の自己評価につながったものと考

えられる。

今回の取り組みで明らかとなった課題である動画視聴やICTの活用をもってしても代替できないコミュニケーションや円滑な人間関係形成の困難という課題への対応として、オンラインによる講義に実習指導者や利用者自身に登場していただく、あるいは地域住民の協力を得て、同時双方向での意見交換会を実施するなど現場実習ならではの経験に近いものを得るため、実習予定だった施設からのライブ講義なども検討する必要がある。このようなデジタル教材・オンデマンド教材の開発及びICTの活用、講義・演習・実習・評価の各段階を連動させるハイブリッド型学習など学生と複数の現場とを有機的につなぐためのカリキュラムを地域関係機関との協働で整備できるかどうか問われてくるだろう。

VI まとめ

コロナ禍という非常事態であっても学修を継続することができ、89人全員が問題なく実習代替プログラムを終了し、おおむね到達目標を達成できていた。実習代替プログラムの具体的内容や指導方法を工夫し、学生の実習目標到達を支援しようとする教員の熱意のもと行った実習代替プログラムの作成と実施は、コロナ禍であっても学生の学修機会を保証するための取組ではあったが、ソーシャルワーカー養成教育の拡充という意味においても有意義な経験となった。

現場に行かなければ経験できない内容をどう補うかといった課題の解消に加え、これからのソーシャルワーカー養成教育では、アウトリーチ、コミュニケーション、チームアプローチなど、より地域とのつながりの中での教育実践が求められるようになる。とりわけ実習カリキュラムは質量ともに増大し、限られた時間と人的リソースで膨大な実習カリキュラムを消化しつつ、より質の高い教育を展

開していくものと思われる。今回の実習代替で、本学社会福祉援助技術現場実習担当教員、職能団体、実習施設・機関、実習指導者との協働作業により動画やワークシートなどの教材作成が可能になった経験や学習管理面での課題解消に向けて講じた手立てを実践に移していくことを通じて、実習指導者や地域関係者と養成校とのより有機的なネットワークとして発展させていくことが求められる。

付記

社会福祉援助技術現場実習代替プログラムの作成と実施にあたって、ご協力いただいた専門職団体、実習指導者、社会福祉法人や施設の運営管理者、非常勤講師、社会福祉士育成委員会(現ソーシャルワーカー育成委員会)や福祉系実習支援室を中心とした本学の教職員の皆様に心より感謝申し上げたい。

文献

- 1) 文部科学省. 新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況. <https://www.mext.go.jp/content/20200605-mxt_kouhou01-00004520_6.pdf>. 2022年4月27日.
- 2) 日本ソーシャルワーク教育学校連盟. 新型コロナウイルス感染拡大傾向に伴う社会福祉士及び精神保健福祉士養成教育に対する考えについて. <http://jaswe.jp/novel_coronavirus/doc/20200403jaswe_kaicho_seimei.pdf>. 2022年5月20日.
- 3) 厚生労働省. 大学等において開講する社会福祉に関する科目の確認に係る指針について(19文科高等917号、厚生労働省社援発第0328003号). <<https://www.mhlw.go.jp/content/000604914.pdf>>. 2022年7月14日.
- 4) 文部科学省・厚生労働省他. 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について(事務連絡令和2年2月28日). <<https://www.mhlw.go.jp/content/000605026.pdf>>2022年6月29日.
- 5) 一般社団法人日本社会福祉士養成校協会. 相談援助実習指導・現場実習 教員テキスト. 27. 東京: 中央法規; 2015.
- 6) 公益社団法人日本社会福祉士会. 社会福祉士実習指導者のための相談援助実習プログラムの考え方と作り方. 190. 東京: 中央法規; 2015.
- 7) 樋口耕一. KH coder. <<https://kncoder.net/>>. 2022年3月14日.
- 8) 樋口耕一. 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—. 235. 京都: ナカニシヤ出版; 2014.
- 9) 小久保志乃, 三浦修, 李在櫨, 佐藤貴洋, 海老田大五朗, 田崎基, 古俣健, 小山弓子, 秋山詩織. 地域支援の展開に向けたソーシャルワークの視点と役割に関する一考察—社会福祉士へのインタビューから—. 新潟青陵学会誌. 2021; 14(2): 22-33.
- 10) 茶屋道拓哉, 山下利恵子, 有村玲香, 大山朝子, 高橋信行. COVID-19流行下におけるソーシャルワーク実習の模索①—学内代替実習の検討プロセスに着目して—. 鹿児島国際大学福祉社会学部論集. 2020; 39(3): 11-20.